

昭和九年八月十日發行

第三十三号



(1) 拝復 手紙有難たう山の紀行も書くつもりで
ついで書きさびれと休舞ひました、以下却報告申
上げます。

Engel - Hörsen : King Spitze, Himmel
stock, Mittel Gruppe, Jungfrau, Misch
Aletschhorn, Finsteraarhorn, Grosse -
Grünhorn, Eiger : Mittellegi, Hörnli
(以上 Berner - Oberland) と Ober-Engadiner
Piz Tremoggia です。

いづれも様、浦松、松方先輩の送られた山で別
に今さら申上げる事ありませんが、簡単に自分
の感じを申上げます、最初 Engel - Hörnli に行
きました大坂 第九、20.1 のクレツナル、シム
に先ず度ぎもを抜かれ食料をうんと買込んで出
掛けました。Grosse - Scheidegg を越へてここ
で Omnisibus (これはここでおかあて乗りました)

物 Kirch - Wasser と Strauberg - Gruppe と
を水で割ったものでそれからは何処でもこれ
を飲む事にしました。で元氣を回復しました。
とて避暑の日で Rausenlanic から約 1000 米の
ひた盛りにすつかりあごせせしました、Gor-
gelhorn の小屋は地圖のそれより約十五分
程下った所です。小屋は気持のよい小屋でした。

Aarhorn がよく見えたので繪を一枚窓から
画きました、ナボー (和蘭の) の様なバツトツ
ツエルもとても気持のいいのでした。次の日の
King Spitze は別た大して驚きませんでした。翌
日の Mittelgruppe ではすつかり驚きました、
最初の小生によつては力一ぱいのものでした、
Gertrude Spitze あたりへ来たころはうでがす
つかり硬直して弱りました。それでとても難場へ来
ると正直なものでどうやら動く様になりました。
この Gertrude Spitze とそのとなりの Melnick -
Spitze とは英國の女登山家 Gertrude Bell が
Wilhelm Melnick と共に十九世紀の末に初登頂の
のです。

次の日に Himmel - stock (Grosse u. Kleine)
をやりました、これを取巻に岩登りの面白さが
ありました。Grosse - Himmel - stock の登り

で *Samii* が最初に松方氏と来て間違つて非常に難かしい所へ出て仕舞つて弱つたと云つた所など最初にその *route* を発見した奴のきんの太さになつたくあきました。そう云はれる迄は文句なしにその間違つたと云ふ方を *route* だと思つて居ました。それがまるで本當にま直な壁に厚んの人指指と中指が入る様な *Crack* が又都合よく車のとびく所にあるのです、本當に *perfect balance of body* を持たなければ感れません。

又その *balance* をくずさずに静かに手と足を動かして行く所になんとも云へない一種の *system* が出来て突にいゝ氣持でした。つともあんな所 *Samii* が先に登つたからいゝ様なものゝ、一人でして登る氣はありません、それに *Samii* はそう云つた處ではかまらず *Seid* をゆるめてくくもすその橋めにむつぱり上げられる様な不快程もなくしかたスリッパして大した事のない程度に *Seid* を引上げるので全く不安の念なく登れました、これは全く彼の才でした。勿論さう云ふ所では *Samii* の居る所から僕のの上つて来る所は見えないのですが、
King (King's mountain は別にこれ小松と連続した様な程度) 岩

登りとしては一流である事を知りました。(Fischerがこの *mittelgruppe* の氷河も何もない小山に *First-erankhorn* 等よりはるかに高く *moirch Jungfrau* 等の三悟近くの金を得る事が出来る様 *Tamii* にあるのでもわかります) *Bergklimmer* から帰つて一週間ばかりしてから *Burgfuerer-joch* 行の電車で乗りました、この旅行は大抵 *Berner alpen* の概念を得るための目的でしたが大抵予定した山を登る事が出来ました。最初の日に *moirch* これは *moirch-joch* からする *Ordinary Route* これは僕の友人の松平人が一踏に登りました。帰りの *moirch-joch* からは *Schi* はすてきでした夏あんな良い雪があらうとはさすがに思ひませんでした。

次の日は *Burgfuerer* を登つて *Schi* で *Konkordia* 迄朝三時廻で行きました。これも *Ordinary Route* 雪もかたからずやはらかな、おぼろさつと行つて来ました。六時頃 *joch* へ帰つて居たと思ひます。それから晝頃出て *Schi* で *Konkordia* 迄。これは中途から雪は悪くなり日はカンカン照りつけられ荷物も重いしあまりいゝ氣持のものではないと思ひました。小屋舎が日本人が来たと思つて *Samii* に *Herz, markt* はどうして居るのだと聞きまして *Samii* 云はく「日本で一生涯砂糖を造つて居る

よ」小屋橋は自分のそばのチーナルの上にある砂
 橋の坂をくだらんでしきりたうなぐいて登りました。
 翌日は *Aletschhorn*。この長いのはたすつかりう
 んざりしました。朝一時に起きてあの地図を見て
 も大きな *Kanarodla-plate* を横断してさらに
Aletscher-Liike の半分付近の道をつたふたよ
 りにクレバスをよけよけ氷河の上に出た河を飛
 越へて行くのはあまりいい、気持のものではありま
 せん。しかし頂上からの眺は相當なものでした、
 特にあの雄大な *Aletsch Gletscher* を一同に見下す
 眺は、帰りに *ice-technique* を習ひました。これ
 は大変有益で後の *Eiger* 等で大変楽でした。その
 翌日はあまり天気がよくなかったが *Grünhorn-
 lake* を越へて *Prinsteraarhorn-Hütte*。 *Grün-
 horn-Liike* からの下りは大きなクレバスがある
 ので随分廻り道をして帰つて行きます。翌日は天
 気が悪く朝から雨と風で山は大荒でした。それで
 も十時頃程かたおさまつた頃を見て *Prinsteraar-
 horn* へ出掛けました。この山は高くそして遠
 くから見てすごく見へるのと反対に *Jungfrau-
 mörche* に近いのでやさしいものでした。若し天気さ
 へ良かったらこんな景色な山は少ないでせう。
 (勿論 *Ordinary Route* の話、他は物凄いう) 翌

日は *Grünhorn* へ行きそれから一気に *Kauteraar-
 horn-Hütte* 迄行きました。 *Grünhorn* は此の旅
 行で最もおどろかしいものでした。ことに細い *ridge*
 を渡りつめて尾根へ出る所の雪庇と氷の *step cut-
 ting* で随分 *hand* のすごい所を見ました。 *Kauter-
 aarhorn-Hütte* は人が大勢でしたし食物もよう
 やく一ぱい一ぱいしかなかつたのであまり好印象
 はありません。殊にこの小屋にはヒュヅラソウオ
 ルトが居りません。
 翌日 *Kauteraarhorn-Lake* から *Grünel* 迄 *Seli
 Jenteraken-Gründelwald* と帰りました。
 その次の旅行は *Ober-Engadine* です。これは
 井田君と二人きりで行きました。 *Postveina-
 St. Moritz, Silsmania, Maloja* それから伊太
 利へ下り *Lago-di-Como*。 *Lugano* を通つて *Ai-
 rolo* へ来てそれから *Lucerne* へ出て帰りました。そ
 の間 *Silsmania* から有名な *Kristian Clucher* の
 居た *Ges-thal* を上つてこれと彼の最も峻した山
 の一つ *Pic Gremoggian* へ登りました。 *Ges-thal*
 は僕の最も好きで谷です。山登る人だつたら恐ら
 くこの谷を自分達の天国だと云ふ事に異存ない
 と思ひます。實を見えて下さい、山と氷河と小じん

ルッア一のメツカ、セント、アンドリユースと并
び称さる、グレニーグルを通る。霧にしめつたマ
ガダムの上に病葉が散敷いて、雨だれをはね飛ば
す、スクリーンワイパーの音のみ、いたずらに耳
に付く。晝項パースの駅違が一軒あるだけでダン
ケルドからブレールマール迄人家なく道は最も急な
所で約三分の一と云ふので自重してダンケルドに
今晚は泊る事にする。テイ川にやうして後一時間半
橋を渡ると宿屋が二三軒あるこゝがやうらしいと
車を止めてよささうな宿屋へつける。もつともこ
れには大変便利なものがあつてA・Aへ自動車場
會へて出して居るハンドブックを見るとその家が
どの位の格式の家で室はいくら飯はいくら、ガラ
ーがはいくらと分つて居る。
初めからこれとこれとねらひを付けて置いて、
気分によささうな家へ付ける訳だ。こゝは雫々あ
たりの気分で勿論鉄道もないから *Off-Season* の
今頃物ずきとやうな末の奴も少ないらしく人通り
はない。昔は教會だつたのを改造したと云ふ妙な
宿屋へ行く。車を止まると人っ子へ入居ないラ
ウンデで景気よく燃へて居るストーブの前におん
やりがへつてお茶を食ふ。燃料は勿論薪だ。バー
チの直ぐ一又位なのがボン／＼燃へて居る。

市へ入る。この町はロツホ、テイより流れ出で
るテイ川にまたがる町で殆どオットランドでは
アババディーンと並んで最も美しい町だらう。テイ
川にかゝるテイ、ブリツカの美しさ、道は広く、
美しい *Scenery* がある、これからどう行くか随分
まよつた。これから北に向つて二つの道がある。
一つは海岸に沿つてがとグイ、モンドローを委
てアババディーンに到るものこれは辻村さんが汽車
を通つた道で、海岸だから道は楽だし、殊にス
ットランドの歴史を見逃すことの出来ないモン
トローズを見る事が出来る、他は東北にテイ川を
上リグレンガリーを通つて分水嶺を *Forest of Athol*
を越へて、インバネスとヤイアーに出ることを出
来ればダンケルドから右折してグレンシーを通つ
て *Devils Elbow* の急坂を越へて差當りの目的地
グレンマールに直接出る事が出来る。橋の見へる
河岸のパラペットのたはらはらに車を止め、地圖を
案じた末、多少困難でも最後の道を取る事にした。
然しグレンシーでは翌日も相変わらずの天気、降つ
たり止んだりの中をグレンシーにかゝる。見渡す
かぎりのムーアランド。人なく家なく畑なく牛も
馬も居ない。唯一途のマガダム道路が霧雨に煙ぶ
る荒野の中をうね／＼と歩いて居るだけだ。名に

しをふ悪魔の上りもセカンド、ギヤードで通過、はるか下の谷にくだく光るデイー川を回掛けてヒタ走りに下る。右方にコツホナガールの草山とすそに横たはるバルモラル離宮の大森林をながめながらブレマールにつき、そのまま約五哩程奥のリン、ノブデイルへ行き、ついで、ついかい鱒の群居するのを見て帰り、ホテルに着く。名は *White Arms*。この辺は夏になると皇帝がバルモラルにある通りこの辺は夏になると皇帝がバルモラルにある。通れるので一種の社交界をなすホテル等もこの辺の一流と何事選ぶ所がない。噴場所が場所だけと時々我々の如きがまぎれ込んで来るだけだ。そのアトモスフィアは雑誌 *White Arms* に出て来る寓真のそれだと思へば間違ひない。翌日はコツホナガールへ行かうかと思つたが朝起きて見ると如何にも山らしくなくつまらないのでゴルフをやる。このコースは北スコットランドの多くのコースがそれである。如くフェアウェイは大体ボールの落ちるなすを除去しては全部フェアウェイだ。こいつが難物でこの上に乗つたらいくらたいてい決して飛ぶない。面白くないので晝から出てアバデイルン送行く事にする。

デイー川にそつて下る道はさすが離宮があるた

めか物凄。先ずドライバーのバラダイスと云ふ可きか。景色はとてよく、道は広く手入が行と、いさ、アバデイルン送約五十哩一時間二十分なら楽である。これは有名なグラニット、シテイル、住む人間は知る人ぞ知るスコッチの中でも又一目置かれるアバードニアン。数学で有名な大学あり、工業少しある。日清戦争頃日本の水雷艦を造つたなんて云ふチヤチナ造船所もある。こゝでも例によつて A.A と相談したのだけれ共すつかり失敗した。

アメリカカンバーなんかあつてガヤ／＼ととても落付かない。これくらいの小さい町になるとホテルが町の人の社交場になるらしく晩く迄ヨツパリツテさばぐ奴がある。これが女も一緒だからやりきれない。対抗上こつちもホックで景気をつけては舞ふ。

翌日は早々逃出してハントレーからスペイ川の流域ストラスペイト入りベンマクドワイを眺めてインバネス、それからカレドニアアンカナルを南下して、モンスターで有名なコツホネスで万一を夢見て、それでも一時間位カメラを片手にがんばつたがモンスターのモの字も出ず、兎すく百何本ンドだかの賞金をミスし、スコットランド悲火に

有名なボニー・パリンズ、チマリーの流浪の船
 グレン・モリストンを通じて西岸に出た。夏
 リートのちきり遊覧りでおおなすタイと遊びの
 くれは又次の聚會とつた。書かしたの、
 (原)

Glasgow-Loch Romond-Glasgow-London.

朝起きたがやかましくてよく眠れなかつたので、
 もう一晚こゝへ泊る考は却棄して、先づ Loch Ro-
 mondだけは見て置く事にす。兄は十時の Ro-
 yal Scots で London へ乗った。Hotel の叔に聞
 いて Ballach 迄行く Bus に乗る。途中汚い町を過
 ると失業者がウヨウヨしてゐる。最近 Times や
 Daily mail で見るに該會で Shipping 及 Ship build-
 ing の不景気が騒がれてゐるが成程 Glasgow、来
 て見るとその説がよく判つた。別に変わった事と無
 く Ballach へ着く。Bus の女車掌に教はつた所へ行
 つて Steamer が出ると聞く。と出るが Special servi-
 ce で恐ろしく高い事を云ふから止むにする。Short
 Cruise といふ奴へ行つて見やうと思つて歩き出し
 たら自動車道の運ちやんらしいのが一時間六シルで
 ドライヴするといふが又と断る。兎に角 Short
 Cruise を聞かせて見やうと Pier へ行つて聞くと

一時に Galbet へ行く汽船で六時に帰つて来ればい
 いぢやないか、 Short Cruise よりは良いと云ふ。
 然し期を打見た所、先ず大した事は無い。今迄見
 飽きた風景だから二時に出る Short Cruise に乗る
 事にした。二時間と合間があるからそこらでブラ
 ンして見たが湖畔に沿つた道はないとみえる。確か
 あるつとりでベソチに腰かけてゐる老人に話しか
 けたのがキツカケで一時間以上も世間話をしてし
 まつた。日本の事も仲々知つてゐる。例によつて
 Manchester-Kano をやりだした。多くの英人の採
 取、日本は人口が激増しては方なく利口を満洲に
 求めたのだといふ見方をしてくる。うるさいから
 こんな事には口を出さぬ主義でゐると、奴さん、
 日本は朝鮮の気候まで変えた、develop させと云
 ふ。可笑しい事を言ふと聞き直してみたら、植林
 して雨がよくなる様になつた事を言つてゐるのだ。何
 奴からそんな事を知つたかと聞けば何と云ふ難
 誌を讀んだといふ。あれやこれやと大分面白い話
 をしたが一時の liners が喋つて暫くすると懐かし
 さめかしい時計を取出して "I must be off now."
 I have enjoyed so much my conversation with
 you, hope you have a nice time on Loch Ro-
 mond" と云つて帰つて行つた。Scott は親し

かる。

Pier へ来つて Cruise の Princess 何と云ふ小艇洗へ行き何時か出るかと聞けど、一時に出る筈ぢいがあるがお前一人きりだから二時迄延ばすと云ふ。尤もな話だから、飯を食はずかと尋ねると食堂へ案内された。丁度四五人の船員がバクソついてゐる。「手を洗ふ所はないか？」と聞いたら、便所の事と考へたか「特に gentlemen のはないが、何処でやつてよよい」と船長が答へる。「いや文字通り手を洗ふので gentlemen の事ぢいやない」と答へたらスチエロードがタオルを擧つて料理場へ案内して呉れた。

聞もなく船が動き出す頃には五人の客が乗り込んで来た。そこからプログララしてゐる水夫や機関士をつかまへて色々話すと、税金が高いとか何とか大分愚痴っぽいのを言ふ。Scotland は非常に気に入つたから今度一月位歩いて見度いと云ふと言つてやつたら、それは良い事を考へた。アメリカ人は短時間に兎るだけ見えて来るだけ歩くが彼等は Scotland を見たのでははない、少くとも一週間は Highland を暮して歩かねば Drive Car was way that he has seen Scotland in what really she is. と云ふ。About Cruise は

話らないと云へばその通りだと答へる。突際つまいない、Cruise を終つて Bus へ来る途中ヒドイ Shower になる。すぐ晴れるには晴れたが、この奴は平気で夕立の中を歩いてゐる。防水被褥がよい綿であらうか。ブルワでも雨はチツトと云ひしないのである。

眠いのでウトウトしてゐるまに Glasgow へ戻る。ホテルに着いてから一寸 St. de Annals へ土産物を買ひに出る。序でに Glasgow の街を歩いてみる。初めてこちらの slum が miserable そのものである事を知つた。恐ろしく汚い。日本の汚さには未だ余裕がある。ここの汚いのは全く息がつかまる程で Clyde 河の辺りにはひどい失業地獄が展開されてゐる。それでも fine weather とか何とか言葉をかけるのがゐる。London での豪然たる気分と比較して Scotland は慥かに良い。

Hotel へ引歸して晩食をとると又 Jews の Barber が来てゐた。櫻所へ行くと自動装置でサツクを賣る仕母があり何か面白い事が書いてあつたが忘れてしまった。Edinburgh の共同便所には汚病に罹つたら敬医者にかゝらすたこれこれの場所へ行くと書いてあるを思ふ。このホテルは一才怪しい点があつて日本ぢならさしづめ丸ノ内ホテルの所

がやないかしらん。

9.30分迄一寸時間があるから手紙を書き、取に出かける。若いのが一人居るだけの *Compartment* へ入ると、この若者が色々話しかけるので日本の事、*Jew* の事 *Free masons* の事等話してみた。何か洗濯液の外交買だと言ふと安っぽい奴である。三等の夜汽車では大快楽だと言へないから学生だと言つてをいた。 *Carlisle* で若いのが一人如る。 *Beulah* で気の良さうな男である。一寸見ればどの程度の奴か判らぬが夜汽車で、三等で、探台とらむに *Glasgow* から *London* へ帰るのだ。から余り上等ぢやない。その内に食堂のボーイと称する生意気な奴が二人入つて来た。相當の年寄りで *single* と子供を連れてくる。辺りはよい色が暫くすると猛烈な猿談を初めやがる。お蔭で色々な知識を得る。二時頃迄若僧と皆で愉快に話した。感は途中から眠つてしまったが奴等は *Euston* 取へ着く迄に二時間位しか眠らなかつたのだらう

(関)

INVERNESS — OBAN

感じの善い *Governments* とそのホテルに別れて *Bun* で *Canal* に行き昨日見てをいた "*Gondolier*"

にのり込む。と、も寒い。やがて *Canal* の静かな朝の水面をガツガツと小波を立て、*minuten* で有名な *Loch Ness* へ向ふ。

途中 *Gorrie* と山吹が黄色く咲き乱れてゐる運河の岸に懸つかのラントが張つてある。未だ眠つてゐるのか人影は見えぬ。船先に立つてゐると恐ろしく冷い。鼻水が出て来るし、*Overs* を着た故ではとても違付かない、毛唐共も流石に寒いらしいが皆燃然としてゐるので采れまじふ。血生臭いビョウチキちゃんか食べる奴は矢張動物的に出来てゐると見える。

やがて *Loch Ness* の入口で次第に両岸が広まり、遂に入江が何か似た相長い *loch* の真中に出る。水は褐色に近い、ビョウチキな冷い感じがする。北側には高い岩山が続いてゐる。地にも一つの湖水の外輪船が黒煙を上げて走つてゐる。

Loch Ness のおぢいさんが "怪物が見られないで残念だ。どうも怪物に少しも寒過ぎると見える。" と感想を言ふながら散歩してゐる。全く怪物に冷寒過ぎると思はれる程寒しい。とて六月とは思はれない。毛唐共は望遠鏡を好む、手に手に時代色のついた代物を下げて怪物でも探すつりかあちらこちら眺めまはしてゐる。暫くは良いが單調な

Nea の景色にたいへん加減能きて終った頃、*Augusta* に着く。贈い歴史をもったお城は今や何とかわいふ *ministers* に獲つてゐる一寸瑞西を想はせる風景である。ホッガラと煙とで囲まれた湖畔に建つた *ministers* の灰色の塔が静かな湖面に影を落してゐる。 *ministers* に続いた湖畔は牧場である。和やかな晴日を浴びて緑の牧草を食む羊の群。その間をあるかなしかの細道がツツ一ツと緑の丘に上つて行く。丘の上には白い壁と灰色の空とシート屋根の別荘が静かに煙を上げてゐる。空は淡くかすんでゐるが陽は暖い。唯々風だけが冷たいのだ。矢張り土地が高い為であらうか。

Gondoliers は此処で運河の閉門を通過する。五ツばかりあるが *Panama* 運河のそれを小規模にした様なもので順次に閉門をあけては水位を高めて次の *Lock Oich* に送せり上つて行くのである。大分間があるので街をブラツク。 *Golf course* もありホテルがある所から見ると避暑地未だ多量らしい。閉門は輸入と汽船の氷夫とが換を運してあけるもので原始的な代物だ。船が一閉門毎に高い水位に上つて来るのを乗客の半分はボソッソと見てゐるが後の半分はそこいらに散つて終つた。

やがて *Lock Oich* に入るとガランとした銅線が響く。甲板に架ると先利から太った男が *Deck-chain* に腰かけてゐたがニコニコ笑ふので "They are doing quite in a primitive way" と話しかけると "Yes, indeed primitive." と腹の底から出る声で答へてニコニコ笑ふ。如何にも悠然としたもので、ホソソとはね返された様な気がした。(聞)

(以下次号へ)

◎ 編輯を終えて

今月は発行が大おくりしました。初の計画では磯野君特号にするつもりで居たのですが印刷の手違ひから原稿がとて不戻だと云はれ、止むを得りませんでした。所がいよいよ始めるとどうも区切が村か子くちくちとして(以下次号)にんて不体裁を様に作り、編輯者として申訳ない次第である。

(園 山)

X X X X X X X X X X